

パラレル

池田はじめ

朝の委員の診察室、中年らしき看護師は部屋をを掃除している。
若い先生が入ってくる。

看護師 おはようございます。

先生 掃除しなくていいよ。

看護師 いつもやっていますよ。

先生 しなくていいの。

看護師、掃除用具を片付ける。先生、診察の机に座る。

看護師 じゃ先生。診察始めていいですか。

先生 だめだ。

看護師 え、でも。

先生 君、その右側のレントゲンファイル取って。

看護師 あ、はい。これですね。

先生 ちがう、その逆の。

看護師 先生、それだと左側じゃないですか。

看護師、ファイルを渡す。

看護師 おはようございます。土門さんお入りください。

小奇麗な服装をした60歳くらいの男が入ってくる。

土門 おはようございます。よろしくお願いします。

看護師 土門さんは扁桃腺の痛みでしたね。先週と同じですか。

土門 同じです。

先生はじつとレントゲン写真を見ている。

先生 扁桃腺ね、切っちゃいますか。

土門 エッ！

看護師 土門さんはただの扁桃腺の腫れで切る必要は……。

先生 いいの、いいの、よく考えてみたら、切っちゃったら全部OKだから。

土門 全部OK？

看護師 先生、ただの扁桃腺の炎症ですよ。

先生 いいの、いいの、全部切るから。

土門 先生、ありがとうございます。

先生 じゃ、そういうことで。君、土門さんを検査の方にまわして。

土門、診察室から出ていく。

看護師 先生、本当に扁桃腺を除去するんですか。

先生 そう。

看護師 オペイらないのにするということですか。

先生の様子が少しおかしくなる。口をパクパクさせて、ギコチない動きになる。

先生 おまえなんか大嫌いだ！！

看護師 えっ、昨日の夜は愛してるっていったのに。

先生 おまえなんかいなくなってしまえ！

犬が診察室に入ってくる。

看護師 だめよ、アムロ。今は仕事中。

犬を診察室の外へ連れ出す。

先生 犬なんか嫌いだ。

看護師 変ね、犬は大好きなはずなのに。

先生の動きがギクシャクとなる。

看護師 もしかして、思ったことと逆のことしゃべってる？

先生、動きが止まる。

看護師 じゃ、しゃべったことは全部逆のことなの？

先生 オペには自信がある。

看護師 オペには自信ないんだ。

先生 私、失敗しないので。

看護師 絶対失敗する！ 土門さん。

先生 呼ばなくていい。呼んで、呼ばなくていい。呼んで。

先生は混乱、頭を抱えている。

看護師 土門さあーん！

看護師、土門さん呼びに行き、連れて入ってくる。

看護師 先生、土門さん、連れてきました。オペ中止だって行ってください。

先生、スクッと立つ。

先生 土門さん、安心してください。

看護師、先生の口を塞いで

看護師 土門さん、先生は今日、思ったことと逆のことを話すみたいなんです。ね、だから、オペするっていったの、しなくていいみたいなんですよ。

土門 そんなバカな。

看護師 でも、みたいなんです。先生、頼むから、オペは中止だと言ってください。

先生 私はやるといったら、やります。安心してください。

看護師 だって扁桃腺、切る必要ないんですよ。

土門 あなたはだまってくてください。先生、私は他の病院でもみてもらいましたが、全然直らないんですよ。でも、先生はさつき手術してくれると言ってくれた。私はそれを信じます。

先生 任せてください。

看護師 だからやる必要のないオペなんですって！

土門 あんた、自分とこの先生信じないで、誰を信じるんだ。

先生 そうだ、僕は出来る。

看護師 できないんですよ。

土門 なぜ？

先生 この人、今、話題の医大に替え玉受験して合格した人なのよ。信じられる。

先生 それはちがう。

看護士 ちがわないの。

土門 本当なのか。先生。

先生 インディアン嘘つかない。

看護士 ほら、嘘ついてる。医師免許だって。病院やった父親のコネでとったって噂だし。

土門 でも、手術してくれるんですよ。

先生 する。

看護士 土門さん、あなたへタしたら死ぬよ。

土門 扁桃腺のオペで？

看護士 そう、この人才でできないから。

土門 人は皆死ぬ。

看護士 へ！？

先生 いや、みんなは死なない。

土門 試してみてもダメだったら、仕方ない。でも試してみないで、あきらめたら悔いが残る。

看護士 そういう問題じゃなくて、先生の口が、逆のことを勝手にしゃべっているだけなの。

土門 本当にそうなのですか。でしたらそのこと証明してみせてください。

看護士 だってさっき私のこと大嫌いだっていったのよ。昨日の夜は好きだっていって

たのに。

土門 先生の本音が出たんじゃないですか。

先生 大嫌いだ。

土門 ほら、大嫌いだっていってますよ。

看護士 だから、それは、反対のことを言ってるの。

土門 あなた、本当に嫌われてるとは、考えないんですか？

看護士 え！

土門 だいたい、私だったら、あなたみたいに「私キレイでしょう。いい人なのよ」オーラ

全開の人って嫌いだな。面と向かってはいわないけど。

先生 僕にはいえないことばだな。

看護士 今のはどう逆に解釈すればいいの。

土門 でしょう。先生は本当のことを話しているだけじゃないですか。

看護士 じゃ、何、心変わり？

土門 先生、オペはしていただけなんですわ？

先生 もちろん。

看護士 私のこと、大好きでしょ。

先生 大嫌い！

看護士 何それ。

土門 先生は普通に思ったことを話している。

先生 そうだ。

看護師 先生、いやタカシくん。私は小さい頃から、あなたを知っているのよ。あなたのことは私が一番よく知ってる。

先生 だから嫌い。

看護師 ということは好きってことね。

土門 そうじゃないでしょお姉さん。あなた基本的に自己中心的に考える人ですね。

看護師 あなたにいわれるすじあいないわ。

土門 だから、嫌われたんじゃないの。

看護師 何いってんのあなた。

二人はつかみあいのケンカになる。

先生 やめてくれ。

先生が止めに入る。

看護師 やめろってことはやれってことなの。

土門 だから、やめろってことでしょう。

先生 そうそう。

看護師 もうわかんない。いったいあなた何言いたいの。

土門 だから普通に話してるだけでしょ。

先生 そうそう。

看護師 そのそうそう意味わかんない。

土門 先生、私のオペやっていただけなんですよね。

先生 オペやる。

看護師 だから、あなたオペ必要ないでしょ。

先生の動きがギコチなくなる。

先生 ボ・ク・ハ・オ・ペ・ヲ・ス・ル。

看護師 もう、やだ。タカシくん、あなた自分の言ってること理解してる？

先生 リ・カ・イ・シ・テ・イ・ル。

看護師 理解してないのね。

土門 私は先生のことばで希望がみえた。

看護師 じゃ、タカシくん本当にオペするの。

先生 しない。

土門 エ！

看護士 と、いうことはするってことね。

土門 昔、こいつの替え玉で受験してやったのは私だ。

先生 嘘だ。

看護士 と、いうことはホント。

土門 私も医者です。

看護士 ウツソ！

土門 この人は若年性の逆転語症だ。

先生 嘘だ。

看護士 何それ。

土門 この人は三年前に私のところに来た。思っていることと逆のことを知らずに話してしまうらしい。病名はついてないが、そんな病状だ。私は、それをパラレルとよんでいる。

想いことばが交わらないからだ。そして今、彼はコンピューターがフリーズするように止まるんだ。

先生 僕はコンピュターじゃない。

土門 確かにそうだけど、聞け、若い人の病気の進行は早い。正常にみえても確実におかしくなってる。あなたも気づいてたんでしょう。そして、彼も。だから、あなたも彼に嘘をついてきたんでしょう。

看護士 私がどんな嘘を……。

土門 この病院の患者さんは、私以外はみんな、あなたの知り合いですよね。

看護士 あなたはいったい何者。

先生 あなたは本当に先生？ 僕のことを見てくれるの？

土門 私は医者だよ。

看護士 この人も医者よ。

土門 あなた方がやっているのは「お医者さんごっこ」だ。彼はそれを終わらせることを望んでいる。もう、限界なんだ。

看護士 でも……。

土門 この人は患者でもあるんだ。

先生 だったら、証明してくれよ。

土門 何を？

先生 あなたが医者だつてことをさ。

土門 そうだな。

土門、バッグからレントゲン写真をとりだし、丸椅子に座らせる。そして自分が医者のイスに座る。

土門　まず、このレントゲン写真を見てくれ。君の今の現実をみよう。
先生　ゲ・ン・ジ・ツ。
看護師　先生

看護師が先生を抱きしめる。

先生　ゲンジツ・ゲンジツ・ゲンジツ・ゲンジツ……

呪文のように先生が唱え続けるなか、暗転。